

# 日台遠隔共同授業である Gastronomic Sciences I の実践報告

——日本人学生へのインタビュー調査からみる学習成果<sup>1)</sup>——

竹 田 里 香  
渡 辺 彰 子  
大和田 和 治

## 要旨

本稿は、日本の私立大学で食マネジメントを専攻する学生と台湾の私立大学でホスピタリティを専攻する学生との Zoom を用いた遠隔共同授業の実践報告である。授業目標は、食を中心とするお互いの文化を英語で学び合うことにあった。授業では、台湾の学生と日本の学生のグループ・ディスカッション、食文化に関するプロジェクト、グループ発表等が行われた。日本人学生は、英語学習歴に関して、留学経験者など様々な背景を持っていた。全授業終了後、授業観察者である第一・第二筆者が日本人学生に対して、学習成果を探るため、日本語で半構造化インタビューを行った。その結果、今回の授業をとおして、学生たちは自らの英語学習経験に照らしながら異文化への理解を深め、「共通語としての英語」(English as a lingua franca: ELF) の使用者としての意識を体得し、英語学習意欲を高めていたことが明らかになった。

キーワード：遠隔共同授業、専門外国語科目、異文化理解、インタビュー調査、ELF

## 目次

- 1 はじめに
- 2 専門外国語科目 Gastronomic Sciences I の授業内容
- 3 インタビュー調査
  - 3.1 目的と質問項目
  - 3.2 参加者
  - 3.3 方法
- 4 結果
- 5 考察
- 6 まとめと今後の課題

## 1 はじめに

本研究は、日本と台湾の大学間の遠隔共同授業における実践報告である。立命館大学食マネジメント学部では2回生以上を対象にした専門外国語科目として、Gastronomic Sciences (以下、GS) I～IVが開講されている。そのうち、GS Iは秋学期開講の選択科目であり、2019年度より台湾の大学と遠隔共同授業を行っている。本研究では、受講生である日本人学生へのインタビュー調査の結果に基づき、GS Iでの学びの成果について報告する。

近年英語教育では、国際社会におけるコミュニケーションの手段として、「共通語としての英語」(English as a lingua franca: ELF) を意識して、英語を教えることに注目が集まっている。ELFとは「英語がコミュニケーションの手段であり、しばしば唯一の選択肢であるときに、異なる第一言語の話者間で交わされる英語の使用すべて」(Seidlhofer, 2011, p. 9) のことである。従来の「外国語としての英語」(English as a foreign language: EFL) におい

ては、英語母語話者の使う英語がモデルとされ、どれだけ英語母語話者に近づくかが英語力を測る指標となっている。これに対し、ELFでは、英語母語話者をモデルにしてはいない。英語母語話者も、英語学習者である非英語母語話者も共にELF使用者(ELF users)となる。<sup>2)</sup>

このようにELFを意識して英語教育を行うことで、英語学習者は、相手の英語を尊重するとともに、自らの英語に責任と自信を持つようになるのではないかと考える。本研究で対象とする日台遠隔共同授業では、日台の学生はELF環境下で、英語を使って、食を中心とする文化についてディスカッションをする。本稿では、このような状況の中で、日本人学生が英語に対してどのような意識を持つようになったかについても見ていく。

以下では、本研究の対象となった授業のカリキュラム上の位置付けを理解するため、まず学部の英語教育を概観し、GS Iにおいてどのように授業が展開されたかを中心に授業内容を述べる。そして、日本人学生全員に対するインタビュー調査方法について述べる。受講生である日本人学生へのインタビュー調査の結果から学生の回答をいくつか抜粋し、GS Iでの学びの成果、ELF使用者としての意識ならびに英語学習に対する意識の変化について考察する。最後に、まとめと今後の課題として、本授業のようなアジア人学生同士の遠隔共同授業の教育的意義について触れる。

## 2 専門外国語科目 Gastronomic Sciences I の授業内容

立命館大学食マネジメント学部の英語プログラムは、3段階のステップによる英語学習者の育成を目指している。Step 1では自らの英語力を知ったうえで英語学習ができる自律した学習者(autonomous learner)、Step 2では自分の将来の職業を見据えた学習者(career-minded learner)を目指している。学生は、2回生の春学期までに大学レベルの英語の4技能と専門科目と関連した英語の語彙力をつけるべく学習する。そして、2回生秋学期からのStep 3では、これまで学習した英語と専門知識を有機的に結び付け、継続的に英語の学習ができる熟達した学習者(expert learner)となるべく学習する。<sup>3)</sup>

必修英語科目のStep 1とStep 2を終えた学生は、さらにStep 3に当たる選択科目である専門外国語科目 Gastronomic Sciences I～IVを履修できる。これらのクラスは、それぞれ異なる専門外国語科目の内容となっている。GS Iは英語教員、GS II～GS IVは専門科目の教員による、英語を媒介語とする科目、すなわちEMI(English-Medium Instruction)の科目である。本研究の対象となるGS Iは、中でも導入的な科目にあたる。GS Iの目的は、GS II～GS IVに進む前に、専門分野における発表やレポートを書くために必要な英語の知識・技能の習得だけでなく、同じアジア圏に属する台湾という異なる文化を持つ人々とコミュニケーションがとれる英語力を養うことにある。

本研究の対象となるGS Iは、2020年度秋学期に開講された科目である。GS Iの受講生は立命館大学で食マネジメントを専攻する2回生以上の日本人学生10名(2回生9名、3回生1名)であった。全15回のうち10回が日台の遠隔共同授業に当てられた。遠隔共同授業の相手校の学生は、台湾の輔仁大学で食とホスピタリティを専攻する台湾人学生50名であった。台湾の学生は大学構内の大教室に集まり授業を受け、日本の学生は各自自宅から受けた。両大学共通の授業目標は、日台の食文化を中心にお互いの文化を英語で学ぶことにあった。以下の図1は台湾側の教室模様を、図2は講義模様を示す。



図1 台湾側の教室模様



図2 台湾側の担当教員の講義模様

GS I の授業は全 15 回の講義で構成されており、最初の 3 講（Week 1～Week 3）と最後の 2 講（Week 14, 15）は日本人学生のみで行われた。日台遠隔共同授業は、第 4 講から第 13 講（Week 4～Week 13）までの計 10 講であった。日本人学生のみで行われた最初の 3 講は、異文化交流のための準備学習と位置付けられていた。具体的には、台湾との遠隔共同授業までに学習しておくべきポイントや心構えといった交流を円滑に進めるための準備を行うとともに、異文化交流に必要なコミュニケーションストラテジーの知識を学ぶといった実践を意識した内容となっていた。具体的には、会話における「協調の原理」（Cooperative Principle）（Grice, 1975）、「会話の含意」（conversational implicature）、「ポライトネス」（Brown & Levinson, 1987）、「高・低コンテクスト文化」（High- and Low-Context Cultures）（Hall, 1976; Meyer, 2014）などの言語学ならびに異文化コミュニケーションの初歩的知識の講義と、それに基づくグループ・ワークを中心に展開された。

第 4 講から第 13 講（Week 4～Week 13）の日台遠隔共同授業には 4 つの授業形態があった。第一に、*Nikkei Asia* の雑誌記事を読み、要約と自身の意見を事前にワードファイルで課題として提出し、授業当日はグループ・ディスカッションを行う形態である。扱った *Nikkei Asia* の記事は、日台の両担当教員が事前に相談して決めた<sup>4)</sup>。いずれの記事も、アジアに関する食やビジネスの内容が経済的観点から述べられていて、両大学の学生にとってふさわしい学習内容であったといえる。

第二は、台湾側の担当教授や、日本側のゲストスピーカーであるブルガリア出身の専門教員（文化人類学・経営人類学）から食に関する講義を受け、その後グループでディスカッションを行う形態である。台湾の担当教授は台湾の観光産業とフード・ツーリズムについて講義を行った。また、ブルガリア出身の専門教員は、日本の小学校の給食（図 3 参照）、ブルガリアのフード・ツーリズム（図 4 参照）、およびヨーグルトの歴史について講義を行った。特に、日本の小学校給食についての講義は、学生にとって自分の経験と照らし合わせることができ、興味深かったようであった。



図 3 学校給食の講義模様

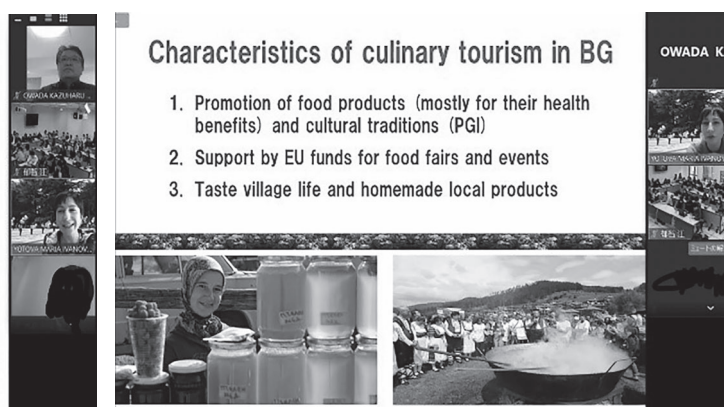


図 4 フード・ツーリズムの講義模様

第三は、日台の学生による共同プロジェクトにおいて、オンラインツール Padlet<sup>5)</sup>（オンライン上の掲示板）を利用した形態である。Padlet 上では、学生は写真を投稿し、コメントを残すことが自由にできる。また、クラス全体で提示し全体ディスカッションを行ったり、Zoom のブレイクアウトセッション機能を用いたグループ・ディスカッションの際に使われた。例えば、“Daily Meals Project”では、学生はグループごとに、1 週間の間で自分で作って食べた食事や外食での食事の写真を撮影して Padlet 内に投稿した（図 5 参照）。また、“Not Well-known Japanese/Taiwanese Food”プロジェクトでは、学生たちは、お互いあまり知られていないと思われる食材を紹介し合った。さらに、“School Lunch Project: Taiwan and Japan”では、日台の教員が各国の小学校給食の情報を投稿し、学生たちも同様に投稿することで異文化における食の相違点について意見を交換していた（図 6 参照）<sup>6)</sup>。



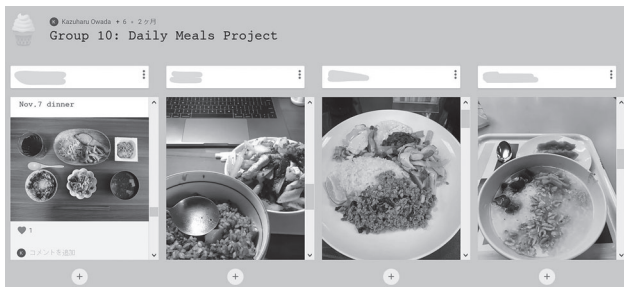


図5 Daily Meals Project の Padlet

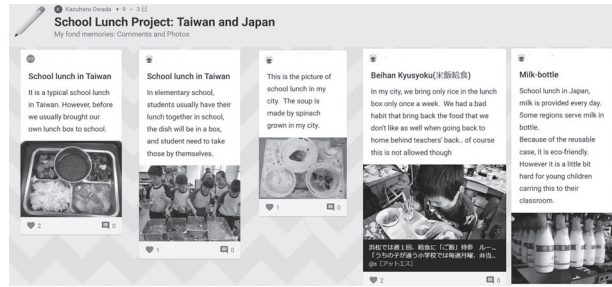


図6 School Lunch Project の Padlet

第四は、日台合同のグループ発表である。大きなテーマは Language & Culture と Communication & Social Skills の2つであった。学生たちはグループに割り当てられたどちらかのテーマの下で自分たちで発表内容を考え、タイトルをつけ、発表用のパワーポイントを作成し、グループ発表を行った。グループ発表は個々のグループに任されていたため、学生はLINEなどのSNSを用いて授業時間外にコミュニケーションをとり、準備を行っていた。Language & Cultureに関する合同発表では、日台のレストラン、ケータリング産業、祝日・休暇・祭事について、共通点や相違点を述べていた。一方、Communication & Social Skillsに関する合同発表では、コミュニケーションの取り方、見方・考え方の違い、コミュニケーション方略の違い、両文化の食事のマナーなど、文化の違いについて、各学生が気付いたことを述べていた。具体的な発表タイトルとしては、“Different Restaurant Culture and Language Between Taiwan and Japan”や“The Impact of Different Cultures on the Catering Industry”などがあつた。

最後の2講(Week 14, 15)は日本人学生のための授業で個人プロジェクトを行った。個人プロジェクトでは、各自が遠隔共同授業をとおして学んだことを掘り下げ、疑問に思ったことを調査する形式で行われた。学生たちはリサーチ・クエッションを立て、自分の研究テーマに基づいた口頭発表を行った。その後、教員からのアドバイスが適宜与えられ、学期末にレポートを提出した<sup>7)</sup>。

### 3 インタビュー調査

#### 3.1 目的と質問項目

本研究の目的は、日台の遠隔共同授業を中心とする Gastronomic Sciences I の授業をとおして日本人学生がどのような学習成果を得たかをインタビュー調査で明らかにすることである。具体的には、以下の3つの質問項目について調査した。

1. このクラスの率直な感想を教えてください。
2. 台湾の学生との英語によるコミュニケーションについてどう思いましたか。
3. 自分自身と英語のこれまでの関係、およびこれからの取り組み方について教えてください。

#### 3.2 参加者

インタビューの参加者は、本授業の受講生である日本人学生10名である。ほとんどの学生は15回の授業を休まずに参加した。学生の内訳は、2回生が9名(男性:1名, 女性:8名)で、3回生が1名(女性)であった。参加者10名の学生の英語レベルは多岐にわたり(1回生終了時の Versant Speaking Test<sup>8)</sup>の結果に基づく CEFR レベル<sup>9)</sup>で、B2は1名、B1は4名、A2は4名、A1は1名であった。帰国子女、留学経験者、スーパーグローバルハイスクール(Super Global High School)指定校の高校出身者などがおり、異文化経験、海外経験、英語力は様々であった。詳細は以下の表1のとおりである。



表1 日本人学生の内訳 (N = 10)

学生	性別	学年	CEFR	海外留学・滞在
A	F	3 回生	A2	3 年
B	M	2 回生	B1	13 年
C	F	2 回生	A2	1 か月
D	F	2 回生	A2	1 か月
E	F	2 回生	B1	11 か月
F	F	2 回生	A1	1 か月
G	F	2 回生	A2	なし
H	F	2 回生	B1	10 か月
I	F	2 回生	B2	1 か月
J	F	2 回生	B1	10 か月

### 3.3 方法

全授業終了後、日台の共同授業をととして GS I のクラスを受講した学生がどのような学びを得たかを知るためインタビュー調査を行った。授業担当者（第三著者）ではない授業観察者2名（第一・第二著者）が Zoom を利用し、日本人学生10名に対して、1名につきおよそ30分から1時間30分の日本語による半構造化インタビューを行った。インタビュー調査は、3.1で述べた3つの質問に基づいて行い、以下の手続きを踏んだ（図6参照）。

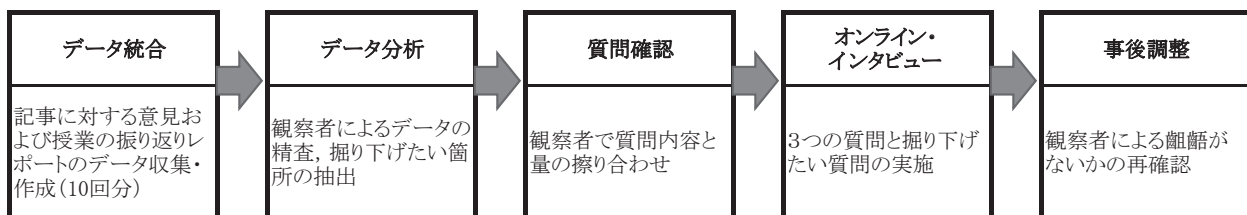


図6 インタビュー調査の手続き

「データ統合」では、英文雑誌記事に対する自分の意見と、遠隔共同授業に関する振り返りレポート（Reflection Paper）の各週分を個人ごとにまとめたデータ10名分を作成した。次に、「データ分析」では、2名の授業観察者が別々に学生がこれまでに書いた自分の意見と振り返りレポートを熟読し、インタビューで掘り下げて聞きたい箇所を抽出した。「質問確認」では、授業観察者同士で聞きたい内容とその量などの擦り合わせを行った。「オンライン・インタビュー」では、3つの質問に加え、掘り下げて聞きたい箇所について質問をした。各インタビューの終了直後には「事後調整」として、授業観察者同士で学生の回答内容に対する理解の齟齬がないように再確認を行った。このような学期を通じた教室観察と学生が書いたレポートに基づき、インタビューすることによって、学生の気づきを言語化させることができたと考える。

## 4. 結果

上の3.1で述べた3つの質問に対する回答について述べる。以下は、インタビュー調査における学生の発言を数点引用し、各発言の最後に表1に示した学生をアルファベットで示す。なお、発言の括弧内は、筆者らが発言内容を分かりやすくするために補足したものである。

質問1の「このクラスの率直な感想を教えてください」については、以下のような回答があった。

- リフレクション・ペーパーを書く時間が(授業の)回を重ねるごとに速く書けるようになっていたので、少し成長した気分になりました。(Aの発言)
- (専門科目の先生は) 私たちが気付かなかったところをどんどん突っ込んでくださるからそうやって質問すればいいんやとか、そういうところに注目すればいいんやとか気付きました。(Eの発言)

上の回答から、A4二枚程度の英文を書くこと(英文記事の要約、自分の意見、遠隔共同授業の振り返り)が毎週の課題であったこともあり、学生にとっては大変であったが、徐々に英文を書くためにかかる時間が短くなったことを各自が自覚でき、英語力の伸びを感じていたことが明らかになった。GS IIおよびGS IVを担当しているブルガリア出身の教員が本GS Iのクラスに入り、学生と共にグループ活動等に参加し、講義や口頭発表の後には率先して多くの質問をしていた。これにより、Q&Aの際にどう質問したらよいか分からない学生にはとてもよい見本となっていた。

質問2の「台湾の学生との英語によるコミュニケーションについてどう思いましたか」については、以下のような回答があった。

- なんか、(日本と台湾が)全く違うってわけでもないし、めちゃくちゃ似てるってわけでもない。隣の国なのにやっぱり文化が違うんだなあっていうのを感じました。(Eの発言)
- (台湾の学生とは) シャベリやすいなと思った。アジアという文化圏が一緒だから空気を読みやすかったのかな。(Bの発言)
- むこう(台湾の学生たち)も(ディスカッションの中で)考えてしゃべっているのが分かって、対等だと感じれた。同じ第二言語(話者)同士だったというところも楽しめた。(Hの発言)

上の回答から、日本人学生にとって台湾は同じアジア圏であるため共通点も多かったが、詳しく話すことで気づきにくい文化による違いについても発見していた。また、言語だけではなく、顔の表情やジェスチャーなどのノンバーバル面を意識することの必要性が分かったようだ。日本人学生は、台湾人学生が何を言いたいのかを想像したうえで、分かりやすい表現を使っていたことも分かった。また、台湾人学生が自分たちの空気を読んで話してくれていることも感じていた。それゆえ、日本人学生は、台湾人学生も英語が第一言語でないため対等感があつた、と述べていた。

質問3の「自分自身と英語のこれまでの関係、およびこれからの取り組み方について教えてください」については、以下のような回答があった。

- たとえ授業で英語がなくなったとしても英語をずっとやっておくといいかなと思いました。(Aの発言)
- 英語にパッと変換できないから、普段から話す練習をするのと、後は単純に単語力かな。大学に入ってから落ちちゃっている。(Dの発言)
- 海外の人に、日本の伝統的な方法でおもてなしする、日本の魅力を伝えるっていう仕事できて、日本が活性化すればいいな、みたいななんもあるし、逆に海外に本物を持ってくってっていう仕事をしたいかな。(Jの発言)

上の回答から、学生が自身の語彙力が足りないことを実感し、勉強を続けていく決意をしていた。英語力はつけたいが、英語そのものの習得が目標ではなく、目的的手段として力をつけたいと述べていた。外国の人に本当の日本のものを紹介したいと感じていた学生もいた。

次に、上記の質問3点への回答の他に興味深かった学生の発言をいくつか挙げる。日本人学生にとって相手校の台湾の学生は、日本に住んでいる留学生ではなく、異文化そのものだったと発言し、また自分が紹介したものを食べたことがないと知り、食べて欲しいという気持ちになったと発言している学生がいた。また、高校で文法が難しくなり、



英語が嫌いになっていたが、自分が幼いときの会話が楽しく、好きだった頃の実感が戻ってきたと言っている学生もいた。台湾の学生と話していてお互いに分からないときに携帯でさっと調べてその写真を見せたりしていたが、そういったテクノロジーの使用も実際に役立つことを実感していた学生もいた。共同授業開始前に、協調の原理を学んで、相手にゆっくり話すことで伝わる努力をしたと述べている学生もいた。

英語の4技能については、ライティングとスピーキングの英語力の伸びを実感している学生が多くいた。特にライティングに関しては、毎回レポートが添削されたものが返却され、それを自ら直すことで、自分の苦手な箇所が分かり、ライティングへの抵抗感が減った点が多く挙げられていた。

## 5. 考察

上で述べた結果からも分かるように、ELFの実践の場に学生をおいたことで、教員が教えなくても、学生自らが、台湾の学生とのコミュニケーションをとる中、無意識にELFとしての英語の重要性に気付いていたと考えられる。このようなELF実践の場として、非母語話者間の遠隔共同授業を実施している大学は限られるが、大学教育の中で経験することには意義がある。なぜならば、学生は現状の社会の中で英語が置かれている状況を自ら認識し、英語を学ぶ理由を考えるきっかけを得られるからである。学生は異文化交流授業における実体験をとおして、英語は英語母語話者だけではなく非英語母語話者間でのコミュニケーションを行う手段であることを認識し、英語学習を継続するうえでもっとも大切な学習の動機づけを高めることが可能となる。

大学の教育現場における異文化交流授業の意義について、上田他（2005）は以下のように述べている。

英語がお互いのコミュニケーションを円滑に行うための手段であるということを考えれば、社会に出て初めて非母語話者の英語に接し、戸惑うのではなく、相手国の英語のコミュニケーションスタイルの特徴を把握し、訓練を積み、お互いの英語を尊重し合う精神を大学の教育の場で養うべきではないだろうか。（p. 171）

この主張のように、今回の日台の遠隔共同授業をとおして、お互いのコミュニケーションスタイルの特徴に触れた日本と台湾の学生は、相手の英語を尊重する態度を身に付けることができたであろう。また、このような経験のない学生と比べて、コミュニケーションスタイルが違う相手の特徴を把握しつつ、相手に理解してもらえ、分かりやすい英語で話す努力をするであろう。英語を外国語とするアジア圏の大学間での遠隔共同授業により、学生はELFの環境下に自らを置くことになり、ELF的な感覚を自然と養うことができる。このような経験は、学生にとってはかけがえのないものとなり、社会に出たときに大きな意義を持つと思われる。

なお、授業終了後、立命館大学とノースウェスタン大学との協力協定に基づくオンライン国際シンポジウム「Beyond コロナ時代の食と農」（2021年3月8日）が開催された。本受講生に口頭発表のボランティアを募ったところ、4名が申し出て、個人発表を行った<sup>10)</sup>。本授業での経験が契機となり、自らの学習成果を海外に向けて発信する意欲が芽生えたのならば、筆者らにとってこれ以上の喜びはない。

## 6. まとめと今後の課題

ICTが進化した現在においては、留学というスタイルを取らなくても、日本でZoom等の会議システムを使用し海外との遠隔共同授業を展開することは比較的容易となってきた。本授業で英語を専攻としない学生が、自らの専門をとおして英語を学び、発信し、学習意欲を高めていたことは特筆に値する。また、異なる文化をもつ学生同士の相互交流をとおして、台湾の学生に分かりやすく通じる英語を使用すれば、十分に交流を行うことが可能であると気付くにいった点は重要である。つまり、学生自らELFの感覚と意識を体得していったといえる。

さらには、英語を媒介言語として非英語母語話者同士の相互交流を行い、文化に根差した相手の使う英語への尊重の意識を持ちつつ、コミュニケーションをとる楽しさを知った点は見逃せない。ライティングに関しては伸びを感じ



ていた学生が多かったが、実際に英語でのコミュニケーションをしたことによって自身の英語力を客観的に省察し、語彙力や文法力の不足にも気付いていた。これにより、今後の英語学習を継続する動機づけが高まったといえる。同時に、本学部の英語教育の目標どおりに、「食」と「異文化」を自ら有機的に結びつけ、継続的に英語の学習ができる熟達した学習者 (expert learner) としての意識を高めていた。

日台の遠隔共同授業は2019年度に開始されたばかりである。両大学の学生にとって、どのような学習内容および授業形態が最適なのかは毎年手探りの状態である。本研究において行われたインタビュー調査からは、授業観察だけでは気付くことのできない学生の考え方や学びの意識を垣間見ることができた。

今回のインタビュー調査は対面ではなく Zoom によるものであった。本研究では SCAT (大谷, 2019) のようなコーディングによる質的データ分析手法は用いておらず、詳細な分析には至っていない。しかしながら、今回の調査は次年度以降の予備調査として、一定の意味があるものと考えられる。今回得た知見を生かして、次年度以降もインタビュー調査を継続することで、よりよい授業へと改善する道が開かれた。また、インタビュー手法においても、今回のように全授業が終了した後に行うのではなく、各講義が終了した直後に何らかの形でコメントを求めるなど、学生の記憶の鮮明なうちにフィードバックをもらうことで、新たな改善点も見えてくるであろう。

最後になるが、本研究で対象とした英語による異文化交流授業が多くの大学で開講され、ELF 意識を自ら持ちながら国際社会へと旅立つ学生が一人でも多く輩出されることを願ってやまない。

## 謝辞

本実践研究に関わった台湾の輔仁大学の郁智江先生、台湾の大学生 50 名、立命館大学食マネジメント学部のヨトヴァ・マリア先生、日本の大学生 10 名の協力に心から感謝の意を表す。なお、本研究は JSPS 科研費 JP18K00893 と JSPS 科研費 JP21K00746 の助成を受けたものである。

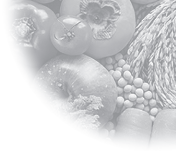
## 注

- 1) 本稿は、2021年8月28日に開催された大学英語教育学会 (JACET) 創立60周年記念国際大会での発表の一部を加筆・修正したものである。
- 2) 詳しくは、木村 (2021) などを参照されたい。
- 3) 詳しくは、大和田 (2021) を参照されたい。
- 4) 扱った記事は、Business card culture fades in Asia as COVID spread cuts contact (Sep 13, 2020), Japan's Saizeriya bets on downsized restaurants amid pandemic (Sep 15, 2020), Taiwan and US move closer to Bilateral Trade Agreement (Sep 1, 2020), First hostile takeover of Japan restaurant chain no reason to cheer (Sep 23, 2020) であった。
- 5) Padlet は、ひとつの画面に様々な人が文字を書いたり写真を貼り付けたりできるオンライン上のツールである。https://ja.padlet.com/ を参照のこと。
- 6) その他のプロジェクトとしては、My Favorite Fast-food Restaurant and Menu Items, My Favorite Family Restaurant and Menu Items, My Favorite Snacks and Candies があった。
- 7) レポートのタイトルとしては、“A Comparative Analysis of Lunch (Bento) Boxes in Japan and Taiwan,” “One Aspect of Food Culture in Taiwan Through the Lens of Night Market,” “Breakfast for University Students in Japan and Taiwan From a Food Cultural Perspective,” “Brand Loyalty of Taiwanese Food in Japan: Its Establishment and Reinforcement” などがあつた。
- 8) Versant Speaking Test は、米国の Pearson 社で開発されたオンラインによるスピーキングテストである。総合点は20点から80点の範囲で算出され、CEFR レベルとの対応関係も示される (https://www.versant.jp/score.html)。
- 9) CEFR は Common European Framework of Reference for Languages (ヨーロッパ言語共通参照枠) の略語で、下から A1, A2, B1, B2, C1, C2 までの6レベルが設定されている (https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages)。
- 10) 詳細については、http://www.ritsume.ac.jp/gast/activity/study/detail/?id=50 を参照されたい。

## 参考文献

上田倫史・大和田和治・大矢政徳・筒井英一郎 (2005) 「社会へつなげる大学英語教育」中野美知子編著『英語教育グローバルデザイン』pp. 135-173, 学文社





- 大谷尚（2019）『質的研究の考え方：研究方法論から SCAT による分析まで』名古屋大学出版会
- 大和田和治（2021）「食マネジメント学部における英語教育—「食」・「異文化」との結びつきを目指して—」『立命館大学食科学研究』第4巻, pp. 105-113.
- 木村護郎クリストフ（2021）『異言語間コミュニケーションの方法—媒介言語をめぐる議論と実際—』大修館書店
- Brown, P., & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J.L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics 3: Speech Acts* (pp. 41-58). Academic Press.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. Anchor Books.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford University Press.
- Meyer, E. (2014). *The culture map: Decoding how people think, lead, and get things done across cultures*. PublicAffairs.
- Seidlhofer, B. (2011). *Understanding English as a lingua franca*. Oxford University Press.

（たけだ りか 立命館大学・外国語嘱託講師）

（わたなべ あきこ 立命館大学・外国語嘱託講師）

（おおわだ かずはる 立命館大学食マネジメント学部・教授）

